

マルサスの戦争及び移植民論

——「民族闘争と國際人口問題」の消極的一篇として——

南 亮 三 郎

一、序 説

- 二、人口増加の妨げとしての戦争
- 三、原始狩獵民族の闘争性
- 四、古代牧畜民族の大移動と闘争
- 五、民族移動後の歐洲世界とアツア近代の牧畜民族
- 六、戦争による人命破壊とその補填作用
- 七、移植民の効果と建設途上の困難
- 八、綜括と若干の批判論點
- 九、人口政策の粉飾と眞の國防國家（結語）

一、序 説

こゝで少しく本稿執筆の動機について述べることを許されたい。

顧みれば人口問題を歴史問題として把握しようとする私の見地は、すでに舊拙著の一たる『人口理論と人口問題』（昭和十年、千倉書房）に於いて高揚せられた所である。その序文の中で私は、特に「同攻諸學者の注意を乞はんと欲する」二點を指摘し、その一として、「人口問題をもつて歴史問題と見ること、従つて人口理論は歴史理論との關聯において、もしくは歴史理論そのものとして、考察せられねばならぬといふことである。人口現象は本來自然發生的な現象でありながら、吾々の眼にうつる限りにおいて、それは社會現象であり、歴史現象である。人類の歴史は人口の増減運動としてみづから具現する。人口運動を通じて、人ははじめて、人類歴史の神秘を探りうるであらう¹⁾」と書き留めた。

當時私はマルサス理論の再吟味に着手してゐたが、右に謂ふ「歴史問題としての人口問題」の着眼は必ずしもマルサス學説とのみ繋がれてゐるのではなかつた。事實、私は、その舊著の中に於いて、まづ一箇の歴史理論としての唯物史觀の構造中に「人口」が如何なる地位を占むべきかを検討し、（第二章）次いで稍や積極的に「歴史發展の動力としての人口」を論述したのであつた（第三章）。然しながら、構想上の導きの糸となつたものは無論マルサスの思想であつたとはいへ、その章に於けるマルサスの叙述は未だ極く一般的、抽象的たるに

まつて、わづかに次の如く説かれたに過ぎなかつた。

「マルサスの思想のうちでは、人口増加には二つの側面が認められてゐた。すなはち人口増加が現存の食物範囲内に阻止せられるといふ *passive* な一面と、それがまた食物範囲の擴大を促進するといふ *active* な一面とが並び存してゐるわけである。しかも注意すべきことは、マルサスが、この二つの相反する側面を相互に何等の関係なきものとしてではなく、一つの連続せる・周期的に繰り返す運動として把握してゐたことである。彼れがコンドルセーに倣つて、幸福（或ひは人口）に關する『退歩的及び進歩的運動』 *retrograde and progressive movements* と呼び、または簡単に、人口の『擺動』 *oscillation* と稱してゐるのがそれである。²⁾」

舊著の残りの諸章、特に第五及び第六の兩章は右の思想の展開を志したものであつた。けれどもそれは、あくまでもマルサス學說の中味に即しての一展開であつて、「歴史問題としての人口問題」を現實的に確證しようと思ふにこの問題の取扱ひは、人類の歴史を民族闘争の歴史として見ることに、若しくは民族闘争を契機として人類史を讀み直すことによつて、一層具體的な成果に達し得べきものであらう。尤も私は、前掲拙著の中で、すでにこの點にも説き及び、「諸民族の歴史を場所と食物とのための永久の闘争」と解せるエルスターの一論稿を紹介し、³⁾そして最後に「人口を單なる量としてだけではなく、本來そのもとに包攝されてゐた特定の質を浮場せしめて、「このやうな見地から近代社會に於ける『人口』を再吟味し、同時にまた『人口の壓力』を單に人口數の量的増加からではなくその質の變化からも理解し始めるな

らば、人口をもつて歴史發展の根本動力となす見地の貫徹は必ずしも不可能ではあるまいと思ふ」と論結したのであつた。

時は少しく遅かつたと曰はうか、右の拙著が刊行せられるのと相前後して私は、拙著に於けるとほゞ同様の着想のもとに本問題の解明に親子二代の精力を傾けたるクーリッシャー兄弟 (Alexander und Eugen Kulischer) の野望的な一著『戦争及び移住行軍。——民族運動としての世界歴史』を、手に入れ得たのであつた。歐洲經濟史を學べる者にとつては「史家クーリッシャー」の名は親しいものゝ一つであらう。こゝにいふ「クーリッシャー兄弟」とは即ち「史家クーリッシャー」の息であつて、この一著はまさに彼等の父がその生涯を通じて獲得したる一種の人口史觀的着想から發してその理論的展開を企てたるものである。

この一著を机邊に置くことすでに久しく、歲月はたゞ徒らに流れ去るのみであつた。その後私は、『人口理論と國際貿易』(昭和十三年、大同書院) を上梓し、その中で「人口問題の克服形態」として聊か人口移動と戦争との意義を説いたが、⁶⁾「戦争と人口」を主題としての研究はなほ少く後まで機會を得るに至らず、それは漸つと最近の『人口理論と人口政策』(昭和十五年、千倉書房) で果されたのである。この最近著の中で私は屢々マルサスの戦争觀に觸れる所があり、例へば次のやうにそれを書き留めた。

「マルサスは嘗つて、人口増加に對する妨げの分類に於いて、戦争を以て主觀的には“vice”に、客觀的には“positive check”に屬するものとし、結局、周期的に起り來る戦争は謂ゆる“Superabundant population”を

一掃するものであるといふ風の説き方をした。「思ふにこの説き方には二つの意味が含まれてゐた。一國・一民族が領土狹隘で人口過剰となると、より廣大なる他國・他民族の領土目差して進軍を開始する。いはゞ成長的民族の自然必然的な生物學的爆發——これがマルサスの第一の意味である。第二の意味は、戦争は死亡を高めることによつてそれだけ國內の過剰人口の壓迫を緩和するといふこと。云々」

然しながら、これらの記述の含められたる『人口理論と入口政策』はもともと戦時人口問題の現實的諸相を主題としたものであつたから、マルサスに關する記述は勢ひ表面的な描寫に止まり、到底彼れ思想を全面的に傳へ得たものではなかつた。況んやゲーリッシャー兄弟の所論に觸れる機會もなく、そこではたゞ當面の「戦争」に主たる關心が注がれてゐたのであつた。——かくて別個の機會は待たれたわけである。

本稿は即ち、如上の經過と動機から發して、先づ『人口原理論』に潜められたるマルサスの戦争及び移植民論を詳しく探索することによつて彼れ思想を整備し、進みて後代諸學者の研究にも照らしながら民族闘争の人口學的考察を遂げんと意圖されたものである。標記の副題——“民族闘争と國際人口問題”——はその最初の意圖を暗示するであらう。しかしながら、私はいま、本稿の完成のために多くの日時を投じ得ないし、また書き進めれば著しく長文となる惧れもあるので、こゝでは取りあへずマルサスの部分のみを「消極的一篇」として提供することにした。しかもこの限られた部分でさへが、今は殆んど覺え書きの程度に、無雜作に且つ急速に書き流して行くの外はない。讀者よ、諒とせられよ。

- (1) 拙著『人口理論と人口問題』序文二頁。
- (2) 同上、九六―九七頁。
- (3) 同上、九九―一〇四頁。
- (4) 同上、一二〇頁。
- (5) A. u. E. Kulischer, *Kriegs- und Wanderzüge: Weltgeschichte als Völkerbeugung*, Berlin u. Leipzig 1932.
- (6) 拙著『人口理論と國際貿易』二四〇―二四五頁。
- (7) 拙著『人口理論と人口政策』九八頁、一三〇頁。

二、人口増加の妨げとしての戦争

さて、多くの讀者はすでに、マルサスが戦争を以て人口増加に對する妨げ checks の一つとしたことは熟知してゐられる所である。たが、吾々は先づ順序として、その妨げの初歩的説明から始めねばならない。

『人口原理論』第一篇第二章に於いてマルサスは人口増加に對する種々なる妨げを説明したが、彼れは先づこの妨げを「窮極の妨げ」 ultimate check と「直接の妨げ」 immediate check とに區別した。前者は「人口と食物との異なる増加率から必然的に生ずる食物の不足」であつて、「實際の飢饉の場合」はそれである。しかしこの場合を除くと窮極の妨げは直接の妨げとはならない。後者は「生存資料の拂底によつて生じたるものと覺しき一切の風習と一切の疾病と、及び生存資料の拂底とは別の、人體を時ならぬに衰弱せしめ破壊せしめる傾

きある精神的または肉體的の一切の原因」である。かくてマルサスはこの様々なる「直接の妨げ」を、周知の如く

I、豫防的妨げ preventive checks

II、積極的妨げ positive checks

に分類したのである¹⁾。

戦争は正に「この積極的妨げ」の一種とせられたが、「人口に對する積極的妨げは極めて多様であり、それが罪惡より生ずると困窮より生ずるとを問はず、人間の天壽を短縮せしめるに多少とも關係ある一切の原因を包含する。故にこの項目の下には、一切の非衛生的なる職業、過激の勞働と寒暑への曝露、極度の貧困、小兒の榮養不良、大都會、凡ゆる種類の不攝生、普通の疾病と流行病の全部、戦争²⁾、疫病、及び飢饉等を數へることが出来る」といふ。

こゝに於いてマルサスは「豫防的妨げ」と「積極的妨げ」との兩者を合し、そしてこれを別の見地から再分類して、

A、罪惡 vice

B、困窮 misery

C、道德的抑制 moral restraint

の三者とした。従つて問題の「積極的妨げ」はそれ自體でまた「罪惡」か「困窮」か、或ひはその混合かに歸着する。「積極的妨げのうち自然の法則から不可避的に生ずると思はれるものは、悉く困窮と呼んでよい。そして吾々が明かに吾々に齎らすもの、例へば戦争、不攝生、及びその他吾々が避けようと思へば避けえられる種々なるものは、混合的性質を帯びてゐる。それらは罪惡によつて吾々に齎らされ、そしてそれらの結果は困窮である。」

これによつて見れば、戦争は客觀的には、「人體を時ならぬに衰弱破壊せしめ」て「人間の天壽を短縮せしめ」る「積極的妨げ」の一つであり、しかもそれは主觀的には「吾々が明かに吾々にもたらすもの」であり、「避けようと思へば避けえられるもの」であつて、あらゆる種類の「不攝生」と同じく、その原因は「罪惡」に發し、結果は正に「困窮」に歸着する、といふのであつた。

かゝる限りでマルサスは「戦争」を極く軽く取扱つたといふ印象を與へる。また「戦争」の原因や結果も、單に前者は罪惡であり後者は困窮である、と説いたに過ぎなかつた。その原因としての「罪惡」は何故に生ずるや、又はそれは「人口増加」と如何に關係するやはこゝで説かれてゐない。——マルサスの戦争觀の眞實の意義は、實はこの、多くの人々によつて記憶せられてゐる「妨げ」の記述の中にあるのではない。第一篇第三章以下、特に第四章以下の原始諸民族、古代北歐諸民族、及び第二編諸章の近代社會に關する、私の所謂「マルサスの歴史篇」の中に、それは始めて全貌を現はすのである。

以下私は姑らく、その詳細なる記述の跡を辿つてマルサス思想の骨格を編み上げようと欲するのであるが、その前に一言述べておくのを便とすることがある。それは即ち、マルサスによれば、戦争は人口増加に對する妨げの一つであつたが、その戦争はまた人口増加それ自身の一結果であるといふ考へ方である。戦争が「罪惡」に發するといふのも、マルサスの考へに遡つて見れば、不斷の「人口増加」を媒介としての「罪惡」といふことに歸着するであらう。但しこの「罪惡」が「避けようと思へば避けえられる」底のものであるかどうかは甚だ疑はしく、またマルサス自身もその歴史的記述篇の中で明かにその反對を印象づけしめる記述を行ひ、むしろ避けんとしても避けえがたき戦争の、民族鬭争の、痛々しき運命的な必然性を説いてゐるのである。

回顧すれば、人口増加に伴ふ戦争の必然不可避を、いま傳はつてゐる文獻の中で初めて説いた人は古代ギリシヤのプラトーンであつたであらう。その『理想國』の古典的なる對象に曰く、

「此くて、前には原始の人民を養ふに足りし所の國土は、今は己に小を感じて不足を告ぐるに至りしに非ずや。全然然り。

此に於て吾等は牧場及び耕作地を得んが爲めに、他國の土地を奪略するに至り、又た若し吾國に於て十分是種の土地を有せる時は、他國來りて之れを取らんとし、此くて其必要の定限を超過して、人々無限に其富を蓄積せんとするに至るにはあらざるか。

ソクラテースよ、此はこれ免れざる所なり。

此くてグラウコーンよ、吾等戦ふにあらずや。

彼れ答へて曰く、眞に然り⁴⁾。」

過剰人口を以て戦争の起因とする考へ方は、すでにこゝに明瞭に表現せられてゐる。マルサスの戦争観の本體も亦根本的にはこれと趣きを同じうしてゐるが、その歴史的實證は詳細を極め、宛然一箇の人類史を編むが如き觀を呈してゐる。人類は不斷の「増殖原理」に促がされて場所的移動を開始し、頻々たる民族間の軋轢闘争を演出しながら、一方では大量の人命を破壊することによつて其の「溢剰人口」を掃蕩し、他方では新なる生存資源を手中に收めることによつて人口對食物の「均衡」を新たなる水準に於いて取戻す、といふ連續的過程が舉證せられてゐるのである。——吾々は先づ原始狩獵民族の闘争性から觀察して行かう。

(1) Malthus, *Principle of Population*, 6th ed. London 1826, Vol. I, p. 12. 邦譯寺尾琢磨氏『マルサス人口論(第六版)』昭和十六年改譯版、慶應出版社刊、一四頁(以下單に邦譯と稱す、譯文は主として本書に據ることとした)

(2) *Ibid.* Vol. I, p. 15. 邦譯一六頁。

(3) *Ibid.* Vol. I, p. 16. 邦譯一七頁。

(4) プラトーン『理想國』木村鷹太郎譯、富山房、第三卷。

三、原始狩獵民族の闘争性

人類社會の最低段階の一つに在るものと思はれるアメリカ・インディアン(第一篇第四章)に於いては「幼年

と疾病との危険を無事に通過したものは、絶えず戦争の危険に曝されてゐる。彼等は軍事行爲を極度に慎しむにも拘はらず、なほ且つ平和の期間を享有することは甚だ稀であるから、劍戟の犠牲も蓋し莫大である。いかに未開のアメリカ民族といへども、各自の社會の所有する領域の権利はよく心得てゐる。他の種族に獵場を荒されぬことが何より大切であるから、この民族的財産を保護するには、極度に神経を尖らしてゐる。かくて無數の争因はこゝに發生し、隣接民族は相互に永遠の敵視状態を續けるのである。」然らばそれは根本的に何より生ずるか。マルサスは言葉を續けて

「一種族に於ける増殖行爲こそは隣りの種族に對する侵略行爲とならざるを得ない。蓋しその増加せる人口を養ふためには、領土の擴張が必要となるからである。従つて自然かゝる場合には鬪争の罷む時といふのは、或ひは相互の死傷によつて均衡が回復された時か、或ひは弱者が剿滅され又はその故郷を追はれたときであらう。」

かくて、「増加せる人口を養ふために」戦争は免れぬ、とマルサスは説く。それは言ひ換へれば、民族の一般的「困窮」から生ずるのだ。その證左としては、若干の原始蠻族の間に、今なほ開戦の際に「往きて彼の民族を喰はん」と叫ばれるのを習ひとせること、そしてこれは結局、戦争の捕虜を喰ふことは勿論、一般に食人の習慣が存してゐたことが指摘される。そしてこの蠻風を以て原始種族に特有なる、單なる敵愾心に發すると見たロバートソンに反對して曰く、

「私の所信を以てすれば、この習慣は、一旦発生した後は他の動機によつて持續されたにしても、その最初に発生した原因が極端な窮乏 (extreme want) にあつたことは疑ひ得ない。この點は、私のロバートソン博士の意見に賛し難いところである。即ち、かゝる蠻風の起源を、最も文明開化の民の間に於てすら時に他の凡ゆる感情を壓倒するところの、かの自己保存の大法則 (the great law of self-preservation) に求めずして、これを必要といふ刺戟なき單なる敵愾心に求めんとするのは、人間性と野蠻國に對する非禮であると思はれる。たゞたとへ偶然にせよこの習慣が右の原因によつて一旦普及した後は、敵の餌食となるかも知れぬといふ恐怖が容易に蠻人の怨恨と復讐心とを刺戟し、必ずしもその時に飢餓に迫られずとも、その捕虜を喰ふに至らしめたのであらう。」

あゝ、かくの如き戦争で敗北を喫したる者は禍なる哉！「敵の侵略を蒙つて耕地を蹂躪され又は獵場から驅逐されれば、もともと携帯しうる貯へは幾許もないから、多くの場合に極度の窮乏に陥つてしまふ。侵略地の民は屢々全部を擧げて森林か山中に避難せねばならぬが、こゝには格別食物は無いから、彼等の多くはこゝに命を殞するのである。かゝる遁走の際には、誰しも一身の安全のみを追ひ、子は親を捨て親は子を捨て、肉親の絆も最早やその力を失ふ。父は一本の小刀、一提の手斧と引換へに、我が子を賣らうとするであらう。幸ひにして劍戟の厄を免れたものも、飢饉や數々の艱苦の手を逃れる術はない。かくて種族が悉く掃蕩されることも稀ではないのである。」かくて正に、「争鬪の目的は征服にあらずして破壊であり、勝者の生は敵の死に依存す

る」といふ状を呈するのである³⁾。

こゝに於いてマルサスの見解は、まさに、窮乏——戦争——窮乏といふ運命的な循環過程を暗示するのではないか。

人口増加の要望が必然に「戦争」と結びつくことも亦おのづから明かであらう。そしてそれは蠻族の間に於いて次の如き獨特の戦法をさへ發案せしむるに至つた。

「自己保存の大原則は、蠻人の胸裡に於いて、各自の種族の安全と強大とを希ふ願望と密接に結合してゐる。従つて彼等の戦争に際しては、文明人の間に見られるやうな武士道の觀念は、到底行はるべくもない。警戒してゐる敵から遁走すること、我が一身に、従つて我が仲間、危険を招く惧れある争鬪を回避すること、これがアメリカ人の面目なのである。」「音に聞えた鬪士の最も望むところは、あらゆる狡計術策と戦略奇襲を弄して、なるべく味方の損害を避けながら、敵を疲弊敗殘せしめることである。對等の條件を以て敵に當るが如きは、愚の骨頂と看做されてゐる。討死は名譽の死どころか一箇の不運で、畢竟その鬪士の名を無謀不注意の人として記憶せしめるだけである。これに反し、日々待伏せて絶好の機會を捉へ、深夜に乗じて敵に迫り、小屋に放火して、敵が裸體のまま無手で火焰から飛び出すところを鏖殺するのが、光榮ある所業であつて、これを徳とする郷人の胸に、永久の記憶を留めるものである。」⁴⁾

然らば何故に、かゝる戦法が發明されたか。

「思ふにこれは、野蠻生活の艱苦危険の下に於いて新たなる人員を養育することの容易ならざるを自覺したからであらう。これら強大なる破壊原因は、往々人口を著しく生存資料の水準以下に降らしめるほど猛烈なこともあるが、しかもアメリカ人が些少の人口減退にも狼狽してこれが増加を熱望する事實から判断すれば、右の如きは一般の場合と認めることは出来ないのである。おそらくこの國には、各種族の渴望する程の増員を養ふ力はないであらう。しかし一種族がその勢力を増大すれば、敵は相對的に弱くなるわけであるから、こゝに新たなる生存の源泉が開かれ、これに反し人口が減少すれば、残存者はこれによつて生活が豊かとなるどころか、むしろ強大な隣國の侵略のために剿滅されるか餓死させられるのである。」

進みて南洋諸島に於ける原住民の考案に移る（第四章）。ところで、ニュー・ギニア（New Guinea）、ニュー・ブリテン（New Britain）、ニュー・カレドニア（New Caledonia）、ニュー・ヘブリッド諸島（the New Hebrides）等の内情は詳かではないが、「おそらく彼等の社會状態は、アメリカの幾多蠻族間に行はれてゐるものと酷似してゐるであらう。かゝる島嶼には異なる數々の種族盤踞し、相互の鬭争に寧日なきが如くである。」これに反し、「巨大なニュー・ジールランド（New Zealand）の事情は可なり判明してゐるが、しかしそれとても住民間の社會状態に關し吾々に快き印象を與へるが如きものではない。船長クックがその別々の三航海記に描寫した該島の光景は、人類の歴史の各頁に遭遇する最も陰慘な暗影の幾許かを示してゐる。かゝる人民の異なる種族間に存する不斷の確執は、アメリカの如何なる蠻族間に於けるよりも更に甚だしく、彼等が人肉を、しかも好

んで喰ふ風習を有することは、疑問の餘地なき事實である。」

次にオタヒート (Otaheite) 及びソサイエティー諸島 (Society Islands) は、旅行者によつて豊饒なることへス
ペリデスの園の如しと謳はれ、一見窮乏の憂ひは影もなきが如くである。だが、マルサスの觀察では、こゝで
も亦同じく、「異なる島嶼の住民間の戦争及び内紛は頻發し、時として極めて破壊的に行はれる。戦場に於け
る人命の浪費以外に、征服者は概ね敵領を劫掠し、豚・家禽を屠殺掠奪し、能ふ限り將來の生存資料を減少せ
しめる。オタヒート島は一七六七年及び一七六八年には豚と家禽とに溢れてゐたが、一七七三年にはこれらの
鳥獸の供給甚だ乏しく、殆んど何物を以てしてもこれを所有者から購ふことは困難であつた。この主たる原因
は、船長クックに従へば、右期間に勃發した戦争にある。」

然らば、かゝる「戦争」は何故に生ずるか。「過剰人口」がそれを觸發する。「好戦心」もそのために激成せ
られるのである。だが、その戦争はまた「人口増加」を切實に要求し、こゝにまた間もなく新たな回復過程
に入り込む、とマルサスは考へた。曰く

「人口過剰はつねに蠻人の生來の好戦心を助長するであらう。又この種の侵略によつて醸成される怨恨は絶
えず慘禍を擴大し、戦争の要因となつた最初の事情のすでに消失した後といへども、依然流血の慘事を續けた
であらう。人口稠密なる社會は、平常節約に節約を重ねて、しかも食物の限界に切迫しつゝある。従つて一兩
度の凶作によつて打撃を蒙るときは、殺兒と亂交の弊風更に甚だしきを加へ、這般の人口減退の原因は、また

右と同じく、これを深刻ならしめた事情のすでに終熄したのちも、暫くは更に旺盛にその作用を續けるであらう。しかし環境の變化とともに、習慣も徐々に或る程度まで變化し、人口は幾許もなく舊に復するであらう。そして最も極端な暴力の加へられぬ限り、久しくその自然的水準以下に停頓することはあり得ない。」

- (1) Malthus, Principle of population, Vol. I, p. 48. 邦譯四一—四二頁。
- (2) Ibid. Vol. I, p. 50. 邦譯四三頁。
- (3) Ibid. Vol. I, p. 49. 邦譯四二頁。
- (4) Ibid. Vol. I, pp. 51—52. 邦譯四四—四五頁。
- (5) Ibid. Vol. I, pp. 52—53. 邦譯四五頁。
- (6) Ibid. Vol. I, pp. 68—69. 邦譯五六—五七頁。
- (7) Ibid. Vol. I, p. 77. 邦譯六三頁。(但しこの箇所の譯文中年號に誤りあり)
- (8) Ibid. Vol. I, pp. 81—82. 邦譯六六—六七頁。

四、古代牧畜民族の大移動と鬭争

北アメリカ及び南洋諸島に現住する原始的狩獵諸民族の状態を觀察し了へたる吾々は、今や、マルサスの歴史篇中最も生彩に富める一章(第一篇第六章)を紹述する段となつた。この一章こそローマ没落史をめぐる北歐諸民族の大移動を取扱つたものである。資料は主としてギボンの『ローマ帝國没落史』に仰いでゐるが、その

他タキトウス (Tacitus) やキヤベリ (Machiavelli) ノーム (Hume) マラー (Mallet) ロバートソン (Robertson) 等々にも據つてゐる。特にギボン (Gibbon) の影響は大きいやうである。

私は嘗つて舊拙著の中に於いて「マルサスの歴史觀」を構想したことがあるが、その際、學生時代のマルサスに與へたるギボンの影響を説き、一七八八年四月十七日附の父に宛てたるマルサスの、次の如き手紙を掲げておいた。

「化學の書物を一時片着けて私は目下、一般歴史及び地理學の知識を得ようと努力してゐます。最近にギボンのローマ帝國没落史を讀みました。ギボンは今では光彩陸離たるヨーロッパ諸國を形成してをる野蠻諸民族の起原及び進歩について若干有益な消息を傳へ、かくも長きあひだ世界を壓服してゐた所の、人々の好奇心を觸發せざるを得ない彼の暗黒期の始まりに若干の光りを投げてゐます。私の考へではギボンは非常に面白い著作家です。彼れの文態は、歴史書としては一般に絢爛に過ぎると云ひ得るかも知れませぬが、時には眞實に崇高の感じがしますし、到るところ興味ふかく且つ愉快です。私はこの續卷の出るのを非常に期待してゐます。」¹⁾

かうしてマルサスの歴史的興味はギボンによつて喚起せられ、後年(一八〇三年)、『人口原理論』の第二版を著す際に、他の豊富な史料とともに「ギボン」が融け込んで來たものと想像せられる。——ともあれ、いかに卓越せる思想家といへども、先人の業績の力を借りずして、忽然とは現はれ得ないのである。——筆は思はず逸脱した。吾々は直ちに、北歐諸民族の大移動と鬭争とに向はねばならぬ。

その冒頭、マルサスは説いて曰く、「人類初期の移住及び植民の歴史は、彼等を驅つてかゝる舉に出でしめた動機と相俟つて、人類が生存資料以上に増殖せんとする不斷の傾向を事實を、顯著に例證してゐる。この種の何らか一般法則なしとすれば、畢竟この世界に住民は分布しなかつたであらう²⁾。「而してその最初の發現はアブラハムとロトとの有名なる別離の對話（創世紀第十三章）に見出されるのであるが、

「この單純なる意見と提案とは、以て地球上に住民を瀰漫せしむる彼の偉大なる動源に對する著しき例證たるものであつて、かゝる作用こそ、時の推移につれて、地球上の恵まれざる一部住民をば、結抗すべからざる力を以て壓迫し、或ひは、アジア、アフリカの燃える沙漠に、或ひはシベリア、北アメリカの凍結せる僻隅に、乏しき糊口の資を求めるの已むなきに至らしめたものである。」然しながらこの移住こそは民族間の不斷の鬭争を招致せざるを得なかつた。「最初の移住は、國土の性質以外には、何の障碍にも逢着した筈はないが、地球上の大部分に稀薄ながらも人口の分布するとともに、これら地方の領有者は手を束ねて他に屈服することなく、中心に近い何れかの土地の過剰人口は、手近かの隣人を驅逐するか、或ひは少くともその領域を通過せずしては、自己にとつての場所を發見するを得ないのであつて、この事は必然に頻々たる争鬭を惹起せしめるであらう³⁾。」

ところで、かゝる移動の發達過程に於いて最も古く、且つ最も擄猛なりしものは漂浪移住を餘儀なくせられる牧畜民であつた。彼等はつとにヨーロッパ及びアジアの中部に占據せる形跡がある。然らば、牧畜民をして

かくも怖るべきものたらしめるものは何であるか。マルサスは答へて曰ふ、

「他なし、彼等が大舉して移動する能力を具ふること、並びに新たなる牧場を求めんがために、この能力を行使するの必要を頻々として感ずることは是である。莫大なる家畜を擁する種族は、直ちに用に供しうる豊富な食料を有するわけであつて、絶對必要の場合には親家畜をも喰ふことが出来る。その婦女は、狩獵種族の婦女に比して遙かに安逸の生活を送り、従つて更に多産である。また男子は協力によつて勇敢となり、移動さへすれば自由に牧場を獲得しうると自信してゐるから、家族扶養についてあまり危惧を感ずることは無いであらう。かゝる諸原因は相合して、幾許もなくその自然的不變的結果、即ち人口増大を招致する。かくて、より頻繁なる移動は必要となり、より廣濶なる地域は漸次に占有され、より廣大なる荒野は彼等の四圍に展開されるに至るのである。缺乏は社會成員中の比較的に不幸なる人々を壓迫し、つひにかゝる連中を同時に扶養することの不可能なる所以が餘りに明白となつて来る。かくて若き子孫達はその母族より押出され、劍によつて自から新たなる天地を開拓し、より幸福なる安住の地を求むべきことを訓へられるものである。」而して「かゝる強大なる活動の動機の下に馳驅する連中の氣力には、年久しく定着し商業農業の如き平和なる職業に従事する住民は、屢々抵抗することが出来ないものである。また同一の境涯にある他種族との頻々たる争闘は畢竟、生存闘争 (struggle for existence) であつて、敗北の報ひは死であり勝利の褒賞は活なる所以が深く腦裡に刻み込まれるから、勢い死物狂ひの戦を演出せざるを得ない⁴⁾」のである。

だが、「豊沃なる地域を占有する種族は、これを獲得し保持するには継続的戦闘を必要としても、一旦これに占據した後は生存資料の豊富に恵まれて急激に増殖し、つひに支那の國境よりバルチックの海岸に至る全土は、勇猛果敢、艱苦に慣れ戦争を好む幾多の蠻族によつて隅なく占有せられるに至つた。ヨーロッパ及びアジア諸國の定住政府が、優越せる人口と優越せる熟練によつて、かゝる破壊的遊牧民に越ゆべからざる障壁を構へてゐた頃は、彼等は相互の争鬪にその有りあまる人口を浪費しつゝあつたが、一旦定住政府の衰微、又はこれら幾多の漂浪種族の偶然的結合が、彼等の勢力を増大せしめるとともに、世界最美の地方も忽ち暴風の襲ふところとなり、支那・ペルシャ・エジプト・及びイタリーは、様々の時代にかゝる蠻族の洪水に壓倒されたのである。」

さて、如上の一般的叙述頭を顯著に例證するものはローマ帝國の没落であつた。――

「北歐の牧民は久しくローマの強大なる武力とローマなる名稱の恐怖とに雌伏し來つた。シムブリ人(Cimbri)が新住地を求めて入寇したとき、執政官五軍はこれがために粉碎せられた話も傳はつてゐるが、最後に大マリウス(Marius)の手にその勝利の進路を遮斷され、蠻族はこの強大なる植民軍の殆んど完膚なき殲滅を眺めて自己の暴舉を後悔せざるを得なかつた。」然しながら、彼等は敗退したのみで、征服されたのではなかつた。そして彼等の出發せしめた軍隊又は植民軍は、或ひは中斷され或ひは追ひかへされたが、大ゲルマン民族の活力は毫も阻害を受くることなく、従つて劍によつて自から進路を拓きうる所へは、少壯果敢なる闘士を陸續侵入

せしむべき備へが成つてゐたのである。……

「フランク人 (Franks)、アレマンニ人 (Allmanni)、ゴート人 (Goths)、及びこれら一般的名稱下に總括せられる、より弱小な冒険者は、帝國各地に潮の如く殺到し、掠奪壓迫を擅にして、現在の收穫はもとより、將來の收穫の希望をも併せて奪ひ去つた。」「しかも移住の波は、依然北方より時を置いて押寄せ來り、先代の不幸を修復し帝國の傾運を支持せる代々の武帝は、かゝる野蠻なる侵入者よりローマ領を保全するがために、超人的難業を果さねばならなかつた。ゴート人は紀元二百五十年並びにその後數年にわたつて海陸兩面より帝國を脅かし、多かれ少なかれ相當の成績を收めたが、最後にその果敢な遠征軍の殆んど全部を喪失した。しかも二百六十九年には、植民の目的を以て妻子を伴へる雲霞の如き移住隊を出發せしめた。最初三十二萬より成ると稱せられたこの怖るべき大群團は、クロウヂュース帝 (Claudius) の武勇と知謀とに粉碎され潰走せしめられた。次のオーレリアン (Aurelian) は、ウクライン (Ukraine) の植民地を出發した同名の新たなる敵に遭遇してこれを打破つたが、「幾許もなくアレマンニ人の獍猛極まる新しき侵略か世界の覆者に肉薄し、オーレリアンは三度び凄慘なる大戦を繰返して、漸くこの大敵を殲滅し、イタリーを荒廢から救ひ得たのであつた。⁶⁾」

だが、「コンスタンティン (Constantine) 治下にゴート人は再び蹶起した。彼等の勢力は久しき平和によつて舊に復し、昔日の悲運をもはや記憶せざる若き時代が興つてゐたのである。然るに相つゞ再度の戦に、その多くが殺戮された」が、更にまた、「好戦帝デュリアン (Julian) はフランク人及びアレマンニ人の新たなる大群

と會戦してこれを征服せねばならなかつた。この大群はコンスタンティン治下の内亂に乗じて祖國ゲルマニアの森林を出發し、ゴール各地に占據して占領の三倍にも達する地域を荒廢せしめた連中である。しかも彼等は到る處に於いて撃退され撃退され、五度の遠征に於いて故郷にまで追撃された。」だが「ヂュリアンの強大な武力によつてかゝる痛打を蒙りながら、この不死身の怪物は數年後には、またもや擡頭し、ヴァレンティニアン (Valentinian) はその領域をアレマニ人、ブルガンディー人 (Burgundians)、サクソン人 (Saxons)、ゴート人、クワディー人 (Quadi)、及びサルマテニア人 (Sarmatians) の頻々たる來寇より防禦するために、剛毅と用心と非凡の天才とを傾倒せざるを得なかつた。」

かくて——「ローマの運命は、ゴート人全部を驅つて北帝國に驀進せしめながら彼の東方及び北方よりせる抵抗しがたき匈奴 (Huns) の移住によつて遂に決せられた。そしてゲルマン諸族はこの力強い壓迫に堪へかねて、森林及び沼地をサルマテニアの追放人にゆだね或ひは少くとも其の過剩人員をローマ帝國諸州に放出せしめんとする決心を固めるに至つた形跡がある。共和國の全盛期に雲霞の如きシムブリ人及びチユートン人 (Teutones) を注ぎ出したバルチックの沿岸から、今また四十萬人の民が遠征の途に上つた。この大群が戦争及び飢饉のために滅ぼされたとき、忽ち他の冒險者達がその後を續いた。スエヴィ人 (Suevi)、ヴァンダール人 (Vandals) アラニ人 (Alani)、ブルガンディー人等はラインを渡り、つひに再び故郷には戻らなかつた。最初に定着した征服者は、新たな侵入者によつて、或ひは追拂はれ或ひは屠殺された。蠻人の雲は北半球の全土より集合せるが

如く、この集團はその進軍の途すがら鮮らしき暗黒と恐怖とを加へ、つひにイタリーの太陽を昏くし、西方世界を夜の帳に包み終つたのである。」

しからは、古代全ヨーロッパの状態を全く一變せしめ、そしてその荒廢の光景を目睹したる當時の歴史家をしてこれを描寫する適當な文字を見出すに苦しめたところの、これら北方蠻族の陸續たる寇入とその破壊的暴力とは、一體何處にその根源を發したのであるか。——「世界最美の地方を通じて、かくも久しく、かくも深刻に、痛感せられたこれらの凄じき影響も、その大部分は畢竟、人口の力が生存資料に優るといふ單純な原因にその源を發してゐる」といふのが、マルサスの堅持せる根本見解であつた。

- (1) 拙著『人口理論と國際貿易』大同書院刊、三三—三四頁。
- (2) Malthus, Principle of Population, Vol. I, p. 92.
- (3) Ibid. Vol. I, p. 93. 邦譯七四—七五頁。
- (4) Ibid. Vol. I, pp. 93—95. 邦譯七五—七六頁。
- (5) Ibid. Vol. I, p. 96. 邦譯七七頁。
- (6) Ibid. Vol. I, pp. 97—99. 邦譯七七頁—七九頁。
- (7) Ibid. Vol. I, pp. 101—102. 邦譯八〇—八一頁。
- (8) Ibid. Vol. I, pp. 102—103. 邦譯八一—八二頁。
- (9) Ibid. Vol. I, p. 103. 邦譯八二頁。

五、民族移動後の歐洲世界とアジア近代の牧畜民族

だが、北方より殺到する移住民の潮は、前項に描寫したる「民族移動」の後の世紀にもなほ絶えなかつた。マルサスは同一章の記述を續けて曰く、

「同一現象はシャルマン (Charlemagne) の征服、暴政、及びその後には於ける帝國瓦解の後にも現はれた。」すなはち「陸の方面に於いては隣國人の勇悍と貪窮とに暫く阻碍されたが、スカンデナヴィア民族の敢爲なる精神と横溢する人口とは、幾許もなく海の方面に捌け口を見出した。彼等はシャルマン大帝の治世前、すでに世人を震駭せしめてゐたが、この偉大なる君主の配慮と氣力とによつて辛うじて撃退された。しかるに大帝の歿後、その羸弱なる後繼者の下に於ける帝國の紛糾に乘じ、彼等は恰かも燎原の火の如く下サクソニー (Lower Saxony)、フリーゼランド (Friesland)、オランダ、フランダース、及びメンツ (Mentz) に達するライン兩岸、に擴がつた。……………」

「彼等は、久しく海岸の地を掠奪した後、フランスの中部に侵入し、最も華麗なる都市を劫掠し焼却し、君主達に尨大なる朝貢を課し、つひには王國內の最美の一州を讓渡せしめるに至つた。彼等は更に長驅してスペイン、イタリー、及びギリシヤをも蹂躪し、到る處を荒廢せしめ戰慄せしめた。」イギリス諸島も亦、彼等の爪牙より免がれ得なかつた。——「二百年にわたつてイギリス諸島はこれら北方の侵入者によつて絶えず掠

奪され、屢々その一部は征服された。第八、第九、第十世紀の間、ヨーロッパの海岸は隈なく彼等の船隊に覆はれ、今日富強を世界に誇る國々も、當時は彼等の、絶えざる劫掠の餌食となつてゐたのである。²⁾」

然らば、これら北歐民族の移住行軍は何故に發したのであるか。マルサスは答へて曰ふ、

「人民が大舉して移住を決行したについては、その地味又は位置に何らかの特殊の缺陷があつたのであらう。して見れば附近の蠻族としては、かゝる棄てられたる土地を右から左へと占領するよりも、自からの劔によつてよりよき運命を開拓することをば、遙かに快しとした筈である。かゝる大移住は、その社會が分散を欲しなかつた證據とはなるが、しかも彼等が故郷に於いて土地と食物とに不足しなかつた證據とはならぬ。」そのうへ、「人民の牧人的風俗と彼等の好戰敢爲の習慣とは、土地の開墾耕作を阻碍した。かくてこれらの森林そのものが、食物の源泉を極めて狹隘なる限界に制限し、これによつて人口の過剰を、換言すれば國土の乏しき供給によつて扶養しうる以上の人口を、喚起したのである。」なほ、かくの如く貧寒にして人口稀薄なる國々が何故に陸續たる大部隊の供給源となつたかについては、「溫暖にして人口稠密なる國々、就中多數の大都市及び工場を抱有する國々に於いては、食物の不足が暫し繼續すれば或ひは猛烈なる疫病の形に於ける、或ひはより恒常的ではあるが比較的緩慢なる疾病の形に於ける、流行病を發生せしめざれば己まぬに反し貧寒にして人煙稀なる國々に於いては、空氣に防腐性あるがため、不足粗惡の食物より發生する困窮は、可なり久しく繼續しても、如上の結果を來さぬことがあり、延いて移住を促進する強烈な刺戟は、遙かに長期にわたつてその作

用を繼續するのである。」

もとより、多くの史家の好んで説く通り、これらの古代牧畜諸民族が極めて好戰的であつたことは事實であらう。否、戦争と冒険とに對する純粹無垢の愛着心のほかに、さらに内紛や戰勝軍の壓迫や、溫和な風土に對する憧憬なども亦、時々移住を促すに役立つたであらう。「しかしながら、この問題を鳥瞰するとき、私は——とマルサスはこの民族移動史の長き一章を結びて曰ふ——當時の歴史をば、人口原理の極めて顯著なる例證と解さざるを得ない。その原理とは即ち、私の所信を以てすれば、ローマ帝國を崩壊せしめた彼の陸續たる冒險的入寇及び移住に對して最初の刺戟と原動力とを與へ、これに不盡の源泉を供給し、屢々これが直接の原因をなしたものであり、帝國崩壞の後には、人口稀薄なるデンマーク及びノルウェーより二百年にわたつて流出し、ヨーロッパの大部分を劫掠蹂躪したものである。アメリカ合衆國の實例に殆んど遜色なき強大なる増殖力を假定せずしては、右の事實は私にとつては説明すべからざるものである。」

こゝに於いて、マルサスの叙述は轉じてアジアに移り、アジア近代の牧畜民族の状態を觀察する（第七章）。吾々は今、その輪郭をこゝに寫して、牧畜民族の移住鬭争史の一部たらしめるであらう。先づマルサスは曰ふ、「アジアに於ける移住及び征服の歴史と、幾多種族の急増と全滅の跡を尋ねることは、いかに簡易に記しても餘りに多くの頁を必要としよう。匈奴の殺到、蒙古人・韃靼人の大侵入、アツティラ (Attila)・成吉思汗

(Zingis Khan)・タメルラン (Tamerlane) の攻略、及びこれらの帝國の興亡に伴ふ動亂の時代を通じて、人口増加に對する妨げは餘りにも明らかである。氣紛れとか便宜とかの些細極まる動機すら、屢々一種族鏖殺の端緒をなした時代の人間殺戮史を繙くとき、吾々はこれ以上の人口増加を阻止した原因を探る代りに、たゞ相繼ぐ征服者の大鎌に不斷に新たなる人間收穫を提供し得た彼の増殖原理 (principle of increase) の偉力に驚かされるばかりである。」かくてマルサスは「むしろ韃靼人の現状とかゝる狂瀾下にあらざる場合の彼等の増加に對する普通の妨げとに」研究を向けることを、より有益とする。

さて韃靼人の状態であるが、先づ「大韃靼國 (Grand Tartary) の西部に住む回教韃靼人 (Mohametan tartars) は、僅かの土地は耕作するが、その方法は粗竿を極め、これを生存の主なる源泉となすには不充分である。蠻人の無精と好戰の精神は各地に瀰漫し、掠奪によつて得られる望みのあるものを敢へて勤勞によつて得ようとは容易に承知しない。」わけでも「大ブッカーリア (Great Bucharia) のウスベック人 (Usbecks) は、すべての回教韃靼人のうちでも最も文明的と稱せられてゐるが、しかも掠奪の精神に於いては餘りに他に遜色はないのであつて、絶えずペルシヤ人と矛を交へ、コラサン (chorasan) 地方の豊沃な平原を荒廢に委ねてゐる。」「異教韃靼人 (heathen Tartars) カルマック人 (Kalnucks) 及び蒙古人 (Mongols) は「掠奪のために戦ふことは稀で、さきを受けた攻撃に對する復讐としての外は滅多に隣人の領土を侵すことはない。さりとして破壊的戰爭が絶對に行はれぬわけではない。回教韃靼人の來寇は、彼等をして不斷の防戰と復仇とを已むなからしめ、またカル

マック人と蒙古人との親縁種族の間の確執は、支那天子の術策に煽られて、兩民族のいづれか一方を全然破滅せしめんとする程の敵意を以て行はれてゐる。⁶⁾」

また、「アラビア及びシリアに於けるベドウィーン人 (Bedouens) も、大韃靼國の住民より遙かに平穩の生活を送つてゐるのではない。牧畜状態の性質そのものが、戦争に對する不斷の機會を供給してゐるやうに思はれる。一種族が或る期に使用する牧場は領土の一小部分にすぎず、一年を費して順次その老大な領域を一巡するのであるが、この全域が該種族の一年間の生活に必要不可欠であり且つその占有と認められてゐる以上、これが侵害は、たとへ該種族が遙か遠方にある時でも必ず開戦の正當な理由と解される。同盟國及び血族はこれらの戦争を更に擴大せしめる。一旦、血を流せば、より以上贖はねばならぬ。そしてかゝる出來事は年ともに増加したから、大部分の種族は相互に紛争し、不斷の敵對状態に生活するのである。」

なほ、「キルギス人 (Kirgisians) は、ロシアに屬する他の漂浪種族に比して、安易に生活してゐる」が、彼等の間には極めて放肆なる掠奪精神がある。「時には彼等は單身國境を越えて幸運を求め、時には有能な首領の下に大舉して隊商を襲ひ、これを悉く剝奪する。」が、この習慣の外に、「キルギス人の間に於いては、その種族の浮薄輕燥なる性癖に基づく極めて頻々たる民族的戦争が行はれるから、暴力的原因に基づく人口増加の妨げが、他のあらゆる妨げを遮斷するほど猛烈であることは、吾々の容易に想像し得るところである。偶發的飢饉は屢々彼等の破壊的戦争、掠奪的侵略、又は長期の旱魃、或ひは家畜の斃死の間に發生して彼等を苦しめ

る。しかし概して貧困の到来は、新たな掠奪的遠征の途に上るべき烽火であつて、困憊せるキルギス人は、或ひは豊かな獲物を携へて歸るか、或ひはその間に於いて一身の生命又は自由を喪失するのである。富か、死か、いづれかを心に決し、いかなる手段をも辭せざる者は、久しく貧困裡に生きる筈はない。」

——マルサスの「歴史篇」はかくてなほ、比較的 low 度の世界諸民族、すなはち第八章・アフリカ各地、第九章・南北シベリア、第十章・トルコ領及びペルシヤ、第十一章・インドスタン及びチベットの住民を取扱ひ、第十二章で「支那及び日本」の状態を記述する。

こゝでも亦、洪水、飢饉、疫症、流行病、内亂、小兒賣買、殺兒等々の陰慘なる「妨げ」が廣汎に行はれつつあることを記述してゐるが、いま吾々の當面の問題たる「戦争」については特に支那の關する次の如き記述が特色的である。すなはちマルサスは支那に關してゲスイット教徒プレマール (Premare) の一報道を引用してゐるがその一齡に曰く、

「人が困窮の極に到れば、最も怖るべき手段をも採るに至ることは、周く人の知るところである。支那では母はその子を殺害し又は遺棄し、親は娘を二束三文に賣り飛ばし、人は利己的で又盜賊が非常に多いが、かゝる光景も緻密なる觀察者にとつては格別不審ではないであらう。むしろ、これ以上の慘狀が現はれぬこと及び當地に於いて爾く頻々たる饑饉に際し幾百萬の窮民が、ヨーロッパの歴史に散見するが如き悽慘なる最後の手段

に訴へることなく、手を束ねて餓死することが不思議である」と。

この觀察は必ずしも全面的な眞理ではあるまいが、近代支那が他國に向つての進軍の代りに周期的な自然の大災厄と軍閥の跳梁に基く不斷の擾亂とにその溢剰人口の主たる吐け口を見出しつゝあつたことは、疑ひがたき事實であつたらう。人はこゝに、人口増加が民族鬭争に驅り立てざる例を見るのであつて、この點はヨーロッパ諸民族の歴史に比して興味ある對照をなすものと云へよう。なほマルサスは日本についてはトウンベルク(Thunberg)及びケムプアー(Kaempfer)の日本史を引用し、「日本の状態は極めて多くの點に於いて、支那のそれと類似してゐる」ことを述べ、たゞ最後に、「日本人は much more warlike, seditious, dissolute, and ambitiousなる點に於いて支那人と異なる」と記してゐる。¹⁰⁾それは吾々にとつてあまり好ましくない記述だが、ともかくも當時の西洋觀察者にはさう見えたのであらう。

- (1) Malthus, Principle of Population, Vol. I, p. 107. 邦譯八六頁。
- (2) Ibid. Vol. I, pp. 112—114. 邦譯九〇—九一頁。
- (3) Ibid. Vol. I, pp. 115—117. 邦譯九二—九四頁。
- (4) Ibid. Vol. I, p. 118. 邦譯九四—九五頁。
- (5) Ibid. Vol. I, pp. 121—122. 邦譯九七頁。
- (6) Ibid. Vol. I, pp. 123—128. 邦譯九八—一〇二頁。
- (7) Ibid. Vol. I, pp. 128—129. 邦譯一〇二頁。

- (8) Ibid. Vol. I. pp. 134—136. 邦譯一〇六一—一〇八頁。
(9) Ibid. Vol. I, p. 216. 邦譯一六七頁。
(10) Ibid. Vol. I, p. 229. 邦譯一七六頁。

六、戦争による人命破壊とその補填作用

さてかくの如きがマルサスの叙述したる人類闘争史上の若干断面であつた。その原因が人口増加に出で、その結果が慘澹たる人命破壊に終りたること——これを一言にして「窮迫——戦争——窮迫」の運命的圖式に歸着したることは、彼れの生彩に描寫せる史的事實であつた。然しながら、かくの如き眞に疑ひがたき史的事實であつたとすれば、吾々はこゝに一つの大いなる疑問に逢着せざるを得ないであらう。それは即ち、民族闘争がその孰れかの側に於ける過剰人口から觸發せられたとしても、その結果が單に最初の溢剩部分を掃蕩する程度に止まらず遙かに廣汎なる人命破壊に終ること屢々であつたとすれば、この廣汎なる人命破壊は一體如何にして補填され得たか、といふ疑問である。これはついでにはマルサスの側に一個の特異なる思想が準備せられつつあつたかに見えるが、吾々は先づ、戦後に於ける人口補填の急速なる作用を描けるマルサスの、若干の記述を掲げることしよう。

ウォレスは『人類の數に關する一論』に於いて、古代ローマの頻々且つ慘澹たる破壊的戦亂の跡を顧み、

「當時のイタリー史を精讀するとき、吾々は、この國が完全に平定せられるまでの不斷の戰爭に従事した・かかる莫大なる人員が、抑も如何にして求められたかに驚嘆せざるを得ない¹⁾」と云つたが、マルサスは多くの史家の見逃がさなかつたこの不思議なる事實について曰く、

「然しながら、若し、戰爭のために絶えず人口を失ふときは、人口増殖力は殆んどその全幅の作用を發揮する習慣を生じ、且つ事情を異にする他國に較べるときは、より大なる割合の出生兒と健康な小兒が成人して武器を執るに適するに至るものと假定すれば——この假定は極めてあり得べきものゝ如くである——如上の驚異も充分説明がつくであらう。彼等をして古代ゲルマン人の如く、敗殘して半ば壊滅した軍隊を奇蹟的に恢復して以て將來の歴史家を驚倒せしめたものも、實にかゝる急速なる供給の流れであつたのである²⁾」

おなじ考へ方は、「殺兒の風習」の結果についての記述にも現はれてゐる。すなはち、ローマでも亦、太古から行はれてゐたが、「しかし彼等が棄兒の行爲に出でたのは、戰爭に基づく人口減少もいまだ以て新興世代に充分に餘地を與へ得ない場合に限られたことは勿論である。従つてこれは、一面では増殖力の全幅作用に對する積極的一障礙と認められぬことはないが、しかも事實は人口増殖を阻害せずしてむしろこれを助長したと明かである³⁾」とマルサスは言ふのである。

近代史に關する事實としてはフランス革命の人命破壊とその反作用を指摘することが出來よう。マルサスの記すところでは、フランシス・デイヴェルノア卿 (Sir Francis d' I vernois) は一七九九年までのフランス軍隊

の總損害を、陸海を通じて百五十萬と推定し、さらに革命に附隨する他の破壊原因に基づく人命損害を百萬と推算し、計二百五十萬とした。氏の計算は過大に失する傾きがあるが、マルサスの推算では百五十萬といふ軍隊の損害數は過少で、マルサスはさらに六十萬を加ふべきものとする⁴⁾。さてデイヴェルノア卿はフランス革命のこの慘禍について語つたことだ、——「革命又は戦争の費した人命の報告を得られる場所が、戰場及び病院であると想像する人々は、先づ以て政治算術の第一原理を學ぶ必要がある。それが殺した人數は、それがこの世に生れ來ることを阻止した・そして今後も阻止するであらう小兒數に比すれば、物の數でない。これこそフランス人口の蒙つた最大の創痍である⁵⁾」と。

ところが、マルサスはこれに對し、フランス人口は革命期を通じてむしろ増加しつゝあつたこと——その原因は革命中に國有地及び大土地所有が分割され、農業状態は却つて活潑となつた所にある——を指摘して、曰ふのである。

「しかも、たとへ如上の推理に充分の根據あるものとしても、フランスは革命によつて恐らく一箇の出生すら損失しなかつたのであらう。フランスは二百五十萬と稱せられる損失については、これを歎く最も正當な理由を持つてゐるが、これより生ずべき將來人口については別である。けだし若しこの二百五十萬が國內に残存したとすれば、他の兩親より生れ出で現にフランスに生存する小兒の相當數は、おそらく生れ出でるに至らなかつた筈だからである。ヨーロッパに於ける統治最も宜しきを得たる國に於いてすら、若し出生を阻止された

將來人口を悲歎せねばならないものとするれば、吾々はつねに喪服を纏はざるを得ないであらう。⁶⁾

それは何といふ興味ある記述であらう！私はすでにこの短い言葉の中に、出生は死亡によつて規定せられるといふマルサスの一思想が片鱗をあらはしてゐると思はざるを得ない。私は嘗つて舊拙著の中に於いてこの點を吟味し、問題を現下諸國の出生率の低下に結びつけながら、「死亡率が近代諸國の人口増加に重大なる役目を演ずるといふマルサスの觀察、及び特に死亡率の低下が結婚率と出生率との上に同様の低下作用を惹き起すといふマルサスの認識は、確かに鋭敏であり又聰明であつた、云々」と述べて置いた。⁷⁾而して今、こゝで問題となるのは、同じ思想の丁度反對の側であつて、高死亡率の後には高出産率があらはれるといふ考へ方である。

この考へ方は『人口原理論』の第二篇第十二章（流行病が出生、死亡、及び婚姻の登録簿に及ぼす影響）と全歴史篇の綜括結論たる第十三章（上記社會觀に基づく一般的推論）とに最もよく顯はれてゐるやうに思ふ。それは無論、戦争に伴ふ高死亡率を取扱つたものではないが——近代史に於いては前述のフランス革命を除いてこの問題を何らかの正確さで統計的に立證することは出来なかつたので——問題を「戦争に伴ふ人命破壊」としてではなく、例へば「流行病に伴ふ人命喪失」として見、そしてその場合の「高死亡率後の人口恢復」として取りあげることが差問へあるまい。

マルサスの記述によれば、黒死病その他の猛烈な流行病が蔓延した年は西暦紀元以來三百九十九、従つてそれは何れかの國に於いて平均四年半の間隔で周期的に循環したことになり、また大飢饉及び凶作の年は二百四

十九であつて、この怖るべき天災は、平均七年半の間隔で來襲したことになる。ところが、これらの二大災厄の跡も人類史の早期の段階では統計數字によつて示すことは出來ない。マルサスはこれを十七世紀末から十八世紀前葉にかけてのプロシヤ及びリトアニアに關するズエースミルヒの死亡表によつて證明せんとする。但しこの一表は、私の檢べたところでは、邦譯書はもとよりマルサスの原著そのものに幾つもの誤記が含まれてゐるので、ズエースミルヒの原典『神の秩序』¹¹⁾に照合して訂正したものを左に掲げて置かう。

これによると一七〇九—一七一〇年の黒死病で二十四萬七千七百餘人、すなはち全人口の三分の一以上が仆れた。しかも人口がかく激減しながら、一七一一年（黒死病の翌年）の婚姻數は黒死病に先立つ六年間の平均の約二倍に達し、出生數もまた未曾有の高さに上つたことが顯著な事實として認められる。そこでマルサスは曰ふ、

「かゝる結果を生じたのは、畢竟結婚年齢にある若者の殆んど全部が、勞働に對する需要と豊富な仕事口とに刺戟されて即座に妻帯したからであらう。この莫大な婚姻數は、勿論同年にはそれに比例する大なる出生數を伴つた筈はない。けだし新婚の夫婦が各々その年内に一兒以上を儲け得た筈はなく、爾餘の出生數は以前に結婚して黒死病流行中に死亡を免れた夫婦の間に生じたのに相違ないからである。」それでも、「出生の死亡に對する比率は三二〇對一〇〇といふ法外な數字を示すに至つた。かくの如き出生の大超過は、おそらく嘗つてアメリカに現はれたものに匹敵するであらう」¹²⁾

プューズミルヒの婚姻・出生・死亡表

(プロシヤ及びリトアニア)

年 平 均	婚 姻	出 生	死 亡	婚姻對出生の比率	死亡對出生の比率
1697に至る5年間	5,747	19,715	14,862	10:34	100:132
1702に至る5年間	6,070	24,112	14,574	10:39	100:165
1708に至る5年間	6,082	26,896	16,430	10:44	100:163
1709 } 黒死病 1710 }	—	—	247,732	—	—
1711	12,028	32,522	10,131	10:27	100:320
1712	6,267	222,970	10,445	10:36	100:220
1716に至る5年間	4,968	21,602	11,984	10:43	100:180
1721に至る5年間	4,324	21,396	12,039	10:49	100:177
1726に至る5年間	4,719	21,452	12,863	10:45	100:166
1731に至る5年間	4,808	20,559	12,825	10:42	100:160
1735に至る4年間	5,424	22,692	15,475	10:41	100:146
1736 流行病の年	5,280	21,859	26,371	—	—
1737	5,765	18,930	24,480	—	—
1742に至る5年間	5,582	22,099	15,255	10:39	100:144
1746に至る4年間	5,469	25,275	15,177	10:46	100:167
1751に至る5年間	6,423	28,235	17,272	10:43	100:163
1756に至る5年間	5,599	28,392	19,154	10:50	100:148
黒死病前の16年間	95,584	380,516	245,763	10:39	100:154
黒死病後の46年間	248,777	1,083,872	690,324	10:43	100:157
長き26年間	324,361	1,464,388 936,087	936,087	10:43	100:156
死亡以上の出生數	—	528,301	—	—	—
黒死病の2年間	5,477	23,977	247,733	—	—
黒死病を含む 64年間全部	349,838	1,488,365 1,183,820	1,183,820	10:42	100:125
死亡以上の出生數	—	304,545	—	—	—

と。かくてマルサスは最終章に至り、いま一つ、一六六六年にイギリスを襲ふた黒死病の影響を指摘し、その人命喪失の空隙もまた間もなく補填せられて餘りあつたことを説く。――

「一六六六年に於けるロンドンの恐るべき黒死病の影響は、十五年乃至二十年の後には、もはや識別しがた
い所となつた。トルコやエジプトの如き國に於いては、周期的に來襲して國土を荒廢せしめる黒死病のため
に、概して人口が大いに減少してゐるか否かは疑問であると言つてもよい。若しこれら諸國に於ける現在人口
にして従前よりも激減したとすれば、その原因は、黒死病のために蒙つた損失よりは、むしろ彼等を桎梏する
政府の虐政壓迫と、その結果たる農業の衰微とに歸すべきである。支那・インドスタン・エジプト・及びその
他の國々の最も破壊的な飢饉の痕跡はいづれも極めて急速に消滅する。そして火山の爆發や地震の如き自然の
大變動も、若し住民を殲滅し或ひは産業精神を阻喪せしめるほど頻りに發生せぬ限り、これによつて一國の平
均人口の蒙る損害の言ふに足りないことは、すでに世人の知るところである。¹³⁾

かくてマルサスは、高死亡率の後には如何にして高出生率が現はれるかを繰返へし敘述した。だが、高死亡率は何故に高出生率を生起せしめるのであるか。マルサスはその論者に於いて、この「何故に」に明白なる答
解を與へるところはなかつた。マルサスは、それを期せずして生じたる人類社會の空隙を時を移さず充填せんとするズエースミルヒ的な「神の秩序」と信じたのであらうか、それともまた、人類自然に内在具存する恒存的な繁殖意欲——或ひは彼れの謂ゆる「増殖原理」の全幅作用に歸せしめたのであらうか。おそらくそれは、

そのいづれでもあつたであらう。何故ならばマルサスにあつては、人類自然に内在する「増殖原理」はそのま
 ままた「神の秩序」に外ならなかつたからである。彼れに於いてはたゞ、この「神の秩序」は人智を以て解し
 がたき幽遠不可思議なるものではなくて、人類社會の突如たる空隙の發生は人口對生存資料の可能的緊迫關係
 を緩めることにより、「増殖原理」の全幅作用を促進せしむるものと考へられたのであらう。

- (1) Wallace, Dissertation on the Numbers of Mankind, Edinburgh 1763, p. 62. (quoted by Malthus)
- (2) Malthus, Principle of Population, Vol. I, pp. 243—244. 邦譯一八六頁。
- (3) Ibid. Vol. I, p. 244. 邦譯一八七頁。
- (4) Ibid. Vol. I, pp. 367—368. 邦譯二八六頁。
- (5) Ibid. Vol. I, p. 376. 邦譯二九二頁。
- (6) Ibid. Vol. I, pp. 376—377. 邦譯二九三頁。
- (7) 拙著『人口理論と國際貿易』一一一—一一八頁（『人口原理論』における生死統計の問題）
- (8) Malthus, Ibid. Vol. I, p. 521. 邦譯四〇九頁。
- (9) Ibid. Vol. I, p. 500. 邦譯三九一頁。
- (10) 委細『一橋論叢』昭和十六年十二月誌上の邦譯書拙評文參照。
- (11) Sissmlich, Die göttliche Ordnung, 4. Aufl. (hrsg. von Baumann) Berlin 1775, Bd. I, Tabellen S. 83—86.
Malthus, Vol. I, pp. 501—502. 邦譯三九二頁。
- (12) Ibid. Vol. I, p. 520. 邦譯四〇六—四〇七頁。

七、移植民の効果と建設途上の困難

以上節を分つて考察したところは人口問題の見地よりするマルサスの戦争論であつた。いま、その所論を綜括するに先立ち一節を設けて特に述べて置きたいのは、民族の鬭争と不可避に結びつくべき移植民に關するマルサスの見解である。

人類史上の主たる鬭争が「場所と食物とを求めて」の民族の、個別的或ひは集團的なる移動と結びついてゐることは極めて明かである。前節までに取扱ひたる原始及び古代諸民族の鬭争は多かれ少なかれ彼等の空間的移動と絡み合つてゐた。それ故にマルサスの戦争論は同時に移住論であつたと言つてもよいであらう。然しながら、移植民を以て狹義を解し、平和的な人口移動を見るならば、それはおのづから別個の相貌を呈し來るであらう。こゝにいふマルサスの移植民論とは、まさにかゝる狹義の近代的移住に關するものであつて、その取扱ひの見地は主として、國內人口の壓力を果して又如何に緩和するに役立つかといふ點に集中してゐる。

先づ移植民の効果に關しては、マルサスは「歴史篇」の隨所にその否定的な態度を表明してゐた。すなはち例へば第一篇第八章（アフリカ）に於いては、

「アフリカは如何なる時代にも奴隸制度の本場であつた。これがために流出する人口は就中歐洲植民地に向つて輸送が始まつてからは、莫大且つ不斷である。しかもフランクリン博士の指摘した通り、アメリカの半土

を黒化せしめた百年にわたる黒人の輸出によつて、アフリカの人口に生じた空隙を發見することは困難であらう。けだしこの不斷の移出、寧日なき戰鬪による無數の犠牲、及び罪惡その他の原因に基づく増殖上の妨げあるに拘はらず、人口はつねに生存資料の限界に切迫しつゝある傾きがあるからである。¹⁾

と述べ、また第十三章(ギリシヤ)に於いては、古代ギリシヤ人は早くから地中海沿岸諸國に「植民」したが、「植民の能力には素より限りがある。植民の目的に特に適した地位に置かれてゐない國にとつては、或る期間が過ぎた後は、母國から追出された市民の植民に適當な空地を見出だすことは、たとへ不可能ではないにしても、なほ至難たるを免れないであらう。これ即ち植民以外に他の手段を求める必要に迫られた所以である²⁾」と説いてゐる。

スコットランドでは早くから移住が行はれた形跡がある。だが人口はそれに拘はらず顯著に増加し、出生率は極めて高かつた。一例はエルジン地方のデットイル(Dunhill)教區の報告に現はれてゐる——とマルサスは第二篇第十章(スコットランド及びアイルランド)で説く。——すなはち、こゝでは「八百三十の人口中、獨身者は僅かに三人に止まり、婚姻一當りの平均出産數は七名に達した。」而して「かゝる異常な出生率は明かに移住の風習によつて惹起されたものであつて、これを見れば單に一國人口の一部を取り去ることによつてこれを減少せしめることの如何の困難なるかと判るであらう。しかし單に産業(industry)と生存源泉(sources of subsistence)とを奪ひ去りさへすれば、人口は直ちに減少せしめられるのである。³⁾」

然しながらマルサスの如上の見解は第三篇第四章「移住論」に於いてその全貌を現はすことになる。マルサスはこゝで、先づ移住が單なる姑息手段に過ぎぬ旨を強調して曰ふ、「人間の産業が地上のあらゆる國民を通じて同時に最良の指揮を受け始めるといふことはあり得ないから、世界中で比較的よく耕作された部分の過剰人口については、その自から現はれる自然的にして明瞭な救済手段は、未だ耕作せられざる部分に移住せしめることだと言ひ得よう。しかもこの未墾部分は、領域ひろく人口も甚だ稀薄であるから、右の方法は一見適當な、少くとも現在の弊惡を遠い將來に移してしまふに充分な性質の救済手段と思はれるかも知れない。しかし一度び經驗に徴し、且つ地上の未開部分の實際状態に照らすならば、それが適當な救済手段であるどころか、些々たる姑息手段にすぎぬことが判るであらう。」

こゝに於いてマルサスは、初期移住者の蒙らざるを得なかつた危険と艱難辛苦とを、主としてバーク (Burke)、レイナル (Raynal)、ロバートソン (Robertson) 等に據りながら次の如く記述する。――

「新開地の植民に關して吾々の得てゐる報告によれば、最初の移住民が冒さねばならなかつた危険と困難辛苦とは、彼等が母國に於いて遭遇したであらうと想像されるものよりも、却つて大なるものがあつたと思はれる。若しも營利心 (the spirit of gain)、冒險的精神 (the spirit of adventure)、及び宗教的狂熱 (religious enthusiasm) の如き、より強大な情熱が移民事業を指揮し鼓舞しなかつたならば、おそらくヨーロッパ人は、家族扶養の困難から生ずる程度の不幸を避けるためなら、久しい以前にアメリカ新世界を放棄してゐたであらう。こ

これらの熱情は最初の冒険者をしてあらゆる障害を克服せしめた。しかも多くの場合、その手段たる、人類を戦慄せしめ移住の眞の目的を蹉跌せしめる底のものであつた。現在に於けるメキシコやペルーのスペイン人の性質はどうあらうと、これら諸國に於ける最初の征服の記録を読む毎に吾々は、亡ぼされた民族が、その道德的資質に於いても、數に於いても、破壊者の民族に優つてゐたことを痛感せざるを得ないのである。⁵⁾」

その若干例として、例へばヴァージニア植民地に於いては三つの企畫が完全に失敗した。「最初の植民の殆んど半數は野蠻人に亡ぼされ、残りは疲勞と飢饉とのために困憊し、國を棄て、失望のうちに歸國した。第二回の植民は全然滅亡した。その事情は明かではないが、彼等もまたインディアンによつて亡ぼされたものと想像されてゐる。第三回の植民も同様に慘澹たる運命に遭遇した。第四回の植民は、飢饉と疾病とのため六箇月間に五百人から僅かに六十人に減じ、残りは飢餓と絶望のうちに、イングランドに歸還せんとしてゐた。時しも「この植民地の建設者たる」デラウェア卿 (Lord Delaware) は、食糧その他萬般の救護品を積載した艦隊を率ゐて、チェサピーク灣口に彼等を出迎へたのであつた。⁶⁾」

ニュー・イングランドに於ける最初の清教徒移民は、數は少なかつたが、やはり同様の運命に陥つた。「彼等は氣候不順の時に上陸し、且つ個人的資金のみによつて支持されてゐたが、冬は早く襲來し、寒氣は厳しかつた。ところがこの地方は森林に覆はれてゐたため、かゝる航海で病み疲れたものゝ元氣をとり戻し又は初年者に榮養を與ふべきものは殆んど得られなかつた。彼等の殆んど半數は壞血病、缺乏、及び嚴寒によつて死亡し

た。しかも生殘者は、かゝる艱難に意氣沮喪せしめられることなく、彼等の性格の力強さに支へられ、また宗教的壓迫から逃れ來つた満足感に助けられて、この野蠻國をして次第に快適な生産物を提供せしめるに至つたのである。」

だが、最も慘澹たる結果に終つたのは何と云つてもギアナ(Guiana)のフランス植民の企圖(一六六三年)であつたらう。——「一萬二千の移住民は雨期に上陸し、天幕や茅屋に收容された。徒らに生活に倦み疲れたこの状態の下に於いて、又すべての必要品の缺乏の下に於いて、彼等は、常に粗食に隨伴する傳染病に襲はれ、また懶惰が下層階級の間に發生せしめるすべての不規則に陥り、殆んど全部が失望の恐怖裡に死んでしまつた。計畫は完全に失敗した。壯健な體質を以てその遭遇した苛烈なる氣候と困窮とに對抗するを得た千人だけがフランスに連れ歸られた。そしてこの遠征に費やされた二千六百萬リールは全く宙に消えてしまつた」のである。

さて如上の初期移住民の困難と失敗との事例から推して、マルサスの指摘するところは先づ第一に、新植民地建設のためにはまづ最初母國から豊富な食糧及び資金の供給がなければならぬといふ點である。——「新植民地の最初の建設は一般に、實際の生産物を超えて著しく人口の増加した國の一例を示すものと云へよう。そしてその自然的結果は、もし母國から充分な食糧が供給されない場合には、人口は先づ最初の乏しい生産物の水準にまで減少し、それが永續的に増加し始めるのは、殘存せる人々が更に耕作を擴大して、彼等自身の生活に

必要な以上の食物量を生産し延いてはこれを家族に分ち得るに至るときであるといふことである。新植民地建設の頻々たる失敗は食物と人口との間の前後の順序を力強く指示する傾きがある。……かくて過度に急激な人口増加から生ずる貧窮を主として引受けねばならぬ人口階級が、遠隔地に自から新植民地を始めるが如きは殆んど不可能なことが判る。彼等は境遇上、成功の唯一の鍵たる資金を當然欲いてゐるに相違ない。」だからそのための財源が要る。そのうへ、植民地を維持するためには、船舶も要れば軍隊も要るのである。

しかし第二の重大なる困難は、住民の間に於ける郷土への愛着心は極めて強く、又それは決して過ちではないといふことである。「洵に神の大なる攝理は、時としてはこの絆を断ち切るべきことを要求してゐるやうに思はれる。しかし別離はそのために些かも苦痛を感じないのである。たとへ一般的幸福はこれによつて増進せられるかも知れないが、それが個人的不幸たることに變りはない。加之、遠隔の移住にはつねに疑惑と不安とが付き纏ひ、特に下層民の憂ひはこの點にある。高い賃銀又は廉價な土地についての説明は果して本當であるのかどうか。又、彼等は輸送と生活維持の手段を提供した人々の勢力下に置かれるのであるが、これらの人々は或ひは彼等を瞞着して利を擧げるかも知れない。彼等が渡らねばならぬ海原は、彼等には肉身舊知との死の別れとも見られようし、又或る意味では、失敗の場合、歸國の可能性を遮断する障碍物とも思はれよう。けれど彼等を故國につれ戻す同様の手段を提供してくれる人があるかどうかを期待し得ないからである。されば冒險的精神が貧困の不安と結合してゐる場合を除いては、これらの憂苦が屢々、彼等をして未知の苦難に逃れ

去るよりは、むしろ現在の苦難を忍ばしめんとする“ことも驚くに足りないのである。”¹⁰⁾

さらに第三の困難は、豊富な沃土や高い賃銀といふ形で約束せられる移住の利益は決して永續きするものではない、といふ點にある。曰く、「移住によつて獲られるすべての資源 (resource) は、たとへ有効に用ひられても、決して永續きのしないものである。おそらくロシア以外のヨーロッパの殆んど凡ゆる國家の住民にして、屢々他國へ移住することによつて彼等の境遇を改善しようと努めてをらぬものはない。かくてこれらの諸國は殆んどすべて、彼等の生産物に比較して過少よりもむしろ過剰の人口を有してゐるから、これらの諸國が相互に何らかの有効な移住資源を與へるものとは考へられない。」¹¹⁾

かくてマルサスは、これらの諸困難から移住政策の效少なき所以を論結して曰ふ、「されば移民の手段が過剰人口に對する救濟策として長い間主張され來つた理由は、人民がもともとその故國を離れるを喜ばず、且つ新しき土地の開拓耕作の困難なるがため、この手段が決して若しくは適當に採用され難いためであることは明かである。たとへこの救濟策が實效があり、母國に於ける害惡と困窮との無秩序を救濟して、これに代ふるに最も繁榮せる新植民地の状態を以てする力があるとしても、この藥瓶は間もなく空になり、かくして無秩序が一層大なる罪惡を伴つて立ち戻つて來た場合には、この方面からの凡ゆる希望は永久にとざされるであらう。」¹²⁾

これに反し、移住の利益は一時的應急策たる所にある、とマルサスは考へる。「故に無制限な人口増加に對

して餘地を作るといふ目的から見れば、移住は明かに全く不充分であるが、しかし部分的・一時的の應急策として、また土地耕作を一層普遍化し文明を更に一層普及するといふ目的からすれば、それは有用且つ適當と思はれるのであつて、たとへ政府が移住を積極的に奨励せねばならぬといふ理由は證明され得ないとしても、これを阻止することは、明かに不正なるとともにこの上もなく不得策でもある。」而して、かゝる移植民政策が効果を奏するのは、國內に於ける勞働供給がその需要の變化に直ちに適應し得ざる場合である。——「例へば内外諸原因が相合して、十年若しくは十二年にわたり一國の人口増加に對して異常な刺戟が與へられてゐたのが、その後稍や緩慢となるが如き場合があれば、雇傭及び賃銀支拂の財源は激減してしまつたにも拘はらず、勞働は殆んど依然として急速に市場に流れ込んで來るであらう。」かゝる場合、「たとへ移住が行はれずとも、人口は漸次勞働に對する需要の状態に一致するであらうが、その間、人口は最も苛酷なる貧窮を免れず、この貧窮の程度は如何なる人間の努力を以てしても殆んど輕減さるべくもない。何故かといふに、それは或る特定の時期には緩和されるであらうが、またそれは特定階級に限られるから、それに比例して一層長期間、一層多數の人民に擴大されるからである。かゝる場合に於ける唯一の眞の救濟策は移住である。」¹³⁾

(1) Malthus, Principle of Population, Vol. I, pp. 147—148.

(2) Ibid. Vol. I, p. 233. 邦譯一七八—一七九頁。

(3) Ibid. Vol. I, pp. 458—459. 邦譯三五九頁。

- (4) Ibid. Vol. II, p. 49. 邦譯四六〇頁。
- (5) Ibid. Vol. II, pp. 49—50. 邦譯四六〇—四六一頁。
- (6) Ibid. Vol. II, pp. 50—51. 邦譯四六一頁。
- (7) Ibid. Vol. II, p. 51. 邦譯四六一—四六二頁。
- (8) Ibid. Vol. II, p. 52. 邦譯四六二頁。
- (9) Ibid. Vol. II, p. 55. 邦譯四六四—四六五頁。
- (10) Ibid. Vol. II, pp. 57—58. 邦譯四六六—四六七頁。
- (11) Ibid. Vol. II, p. 58. 邦譯四六七頁。
- (12) Ibid. Vol. II, pp. 59—60. 邦譯四六八頁。
- (13) Ibid. Vol. II, pp. 60—62. 邦譯四六九—四七〇頁。

八、綜括と若干の批判論點

以上長々しくマルサスの戦争及び移植民論を紹述したことであるが、いまこれを綜觀しながら若干の批判論點を指摘すると、ほゞ次の如く概括し得るであらう。

(一) マルサスによれば民族の鬭争は先づ「場所と食物との不足」から生じた。この不足こそ人口の不斷の増加から觸發せられたものである。従つて戦争の原因は根本的には當該民族の過剰人口にあつたと言へるであ

らう。かの民族の移動は、より廣濶、より豊富なる「場所と食物」を求めての不斷の遍歴であつた。そしてそれは絶えず民族の鬭争と結びついたのである。——吾々はこゝに先づ、戦争の始發點としての「窮迫」を見る。

(二) 然るに、民族間のこの頻々たる鬭争は、多くの場合、測り知れない人命數の破滅に終つた。かくてそこには、鬭争の機縁を作り絶えずこれを激成した「溢剩人口」の掃蕩があり、残るものはたゞ悽慘なる「荒廢」のみであつた。かくて戦争は、人口増加の著大なる「妨げ」となり、そこに再び廣汎深刻なる「窮迫」を結果せしめるのである。マルサスは曰ふ、「豫防的妨げの作用——戦争——大都市及び工場内に於ける黙々として而かも確實な生命の破壊——及び多數細民の密集家屋と不足の食物——は孰れも人口が生存資料以上に増殖することを妨害するものであつて、いま一見まさしく奇異の觀ある言葉を用ひれば、これらの妨げは、激烈な大流行病の必要に代つて溢剩人口を掃蕩するものと言へるのである」と。——かくて吾々はこゝに、「窮迫」を始發點として生じたる「戦争」が再び別個の平面に於ける「窮迫」に到達せざるを得ないこと、一言にして「窮迫——戦争——窮迫」といふ運命的連鎖に歸着せざるを得ないことを知るのである。吾々はこれをひとまづ、幸福と人口とに關するマルサスの「退歩的」又は「逆轉的運動過程」として把握することが出来るであらう。

(三) 然しながら、戦争によつて齎らされる「荒廢」と「人命破壊」の跡とは、やがて間もなく、迅速なる勢ひを以て恢復せられるのが常であつた。それは如何にして何故であつたか。マルサス自身はこの問ひの「如何にして」に答へた。空地の擴大は人間産業を刺戟して新たな活況を振起せしめ、それはやがて又、婚姻と

出生とを刺戟して人命破壊後の空席を迅速に充填して餘りがあるのであつた。けれども、かくの如き高死亡率の後には「何故に」また高出生率を生ぜしめるか、はマルサス自身の明かに説き及ばなかつたところである。吾々はたゞ、彼れの思想の中には、出生は死亡によつて規定せられるといふ着想の潜められてゐた事を認め、この着想は彼れの理論の一本の支柱たる「規制原理」——すなはち人口は生存資料によつて規制せられるといふ原理——と結びつくものとして理解するの外はない。「洵に産業(industry)が依然として盛んな間は、戦争も以て著しく人口を減少せしめることなく、これに反し、生存資料を求め得ない場合には、平和も以て人口を増加せしめ得ない」とマルサスは言つてゐる。人口の増加はマルサスに於いては飽くまでも、生存資料の増加に伴うて起るべき結果であつた。けれどもその生存資料は何によつて増大せしめられるかと云へば、そこに作用するものはまた「人口」の外にはない筈である。して見れば、「人口」はこゝに單なる結果たることから、それ自身でまた原因たる役割をも演ずるのである。こゝに於いて讀者は始めて、本稿の序説の部分で引用したる拙著中の一齣——「マルサスの思想のうちでは、人口増加には二つの側面が認められてゐた。すなはち人口増加が現存の食物範囲内に阻止せられるといふ passive な一面と、それがまた食物範囲の擴大を促進するといふ active な一面とが並び存してゐる」といふ立言の意味を了解せられるであらう。生活空間の擴大を目指しての戦争はそれ自身すでに、かゝる人口の active な面の現はれに過ぎないが、戦争の齎したる荒廢と人命破壊との跡を迅速に修復しゆくものも亦、人口の active な面として見なければならぬ。而して吾々はこゝに、幸福

と人口とに關するマルサスの「進歩的」又は「進轉的運動過程」を見るのである。

かく解し來るならば、「窮迫——戦争——窮迫」の運命的連鎖が何故に一回限りで終ることなく、到達點の「窮迫」は何故にまた始發點の「窮迫」を準備するか、換言すれば右の連鎖が何故に周期的に循環するか、といふ點もまた明かとなるであらう。そしてこの運命的連鎖の周期的循環 (Not-Krieg—Not の反復) といふマルサスの根本思想こそ本稿の序説に述べたるクーリッシャー兄弟の『戦争及び移住行軍——民族運動としての世界史』の理論的武器となつたものである。もとより人類史上には、逆轉的運動過程の深刻なるあまり遂に再び起つ能はざる破滅の深淵に陥つた史實を傳へる部分も稀ではあるまい。だが、「しかし——舊拙著に於いて私のすでに述べた如く——我々の眼前に横はれる現實の歴史は、一方にその發展、他方に人口増加、を指し示してゐる。人間社會は發展し、そして同時に人口は増加したのである。この事實を前にして、それを、右の兩面の運動から説明するためには、『進歩的』側面をより重視せねばならない。」かくてマルサスの思想は、恰かもヘーゲルの辯證法を想はしめる如く、「人口増加は絶えず進退兩面の周期的擺動を経過するけれども、結局は、人口對食物關係によつて表示せらるゝ人間社會を發展に導く」といふ點にまで追求し行くことが出来る、とさへ私は思ふのである。

然らば次に、マルサスの移植民論には如何なる批判論點が含まれてゐるか。——

(四) 移植民の効果についてはマルサスは先づ極めて懷疑的であり、母國內に於ける不斷の人口増加に照合

すれば移植民は單なる姑息手段にすぎないと見た。この點については學者の間に若干の異論があらうと思はれるが、いま、マルサスの所論のうち特に興味あるものは植民地建設の根本前提は母國に於ける食糧の豊富であると説く部分である。豊富なる食糧の、そして潤澤なる資金の供給を前提とせずして初期植民地の建設は如何にして可能であらうか。移住行軍は豊富なる生存資源を先づ母國より携行することによつてのみ所期の目的を達し得る。だが、それは果して海洋を越えての遠隔の近代的移住にのみ言ひ得ることであらうか。それとも又、おなじことは、マルサスの生彩に描きたる北歐諸民族の、かの幾世紀にもわたつた大移動についても言へるであらうか。

一見したところでは、マルサスはこゝで一箇の自家撞着に陥つてゐるやうに思はれる。何故ならば、移住の前提が若し母國に於ける食糧の豊富でなければならず、そしてかくの如き前提はすでに移住民の大群を母國より放出せねばならぬといふ根本事實——過剩人口——から否定せられるがためにおよそ移植民は理論的に成り立ちがたいとするならば、かの古代北歐諸民族の移動は故郷に於ける「豊富の食糧」を前提としてのみ成り立つたと推論する外はないからである。しかし、かゝる推論は、明かにマルサスの思想に反する。マルサスにとつては、民族の移動に故郷に於ける生活空間の狹隘化に促がされて生じたものであり、「人類初期の移住及び植民の歴史は、彼等を驅つて斯かる舉に出でしめた動機と相俟つて、人類が生存資料以上に増殖せんとする不斷の傾向を有する事を、顯著に例證し」、「この種の何らか一般法則なしとすれば、畢竟この世界に住民は分

布しなかつたであらう」といふのがマルサスの根本見解だつたからである。

然らば右の問題は如何に解すべきであるか。それはマルサス自身の側に於ける單なる背理であるか、それともマルサスに於ける二つの推論は矛盾なしに收まり得るものであるか。私はあらゆる民族の移動が根本的には、より廣濶、且つより快適なる生活空間を求めんとする衝動に發するといふマルサスの根本見解は正しいと思ふ。と同時に、近代的殖民地の建設が母國よりする豊富なる生存資源の供給なしに不可能だとするマルサスの見解にもまた争論の餘地はないと思ふ。たゞこゝで問題を紛糾せしめマルサスをして自家撞着に陥らしむる如き觀を呈せしめたものは、敢へて掠奪を辭せざりし北歐諸民族の移住行軍と、武装なき近代の平和的移民群との性格の相違を、想ひうかべなかつた所にあるものと言へよう。

(五) マルサスの所論にはまた、移民の放出は結局母國に空隙を作らずといふ思想があつた。過剰人口の吐け口として考へられる移民は、それだけ母國內に生活空間を擴大して残すといふ性質のものではなく、一時的にもせよ擴大せられたる生活空間は謂ゆる「増殖原理」の全幅作用を誘致することによつて、幾許もなく元の緊迫状態に復歸せしめる、とマルサスは考へたのである。この點は近代植民政策學者も敢へて異議を申し出でないであらう。イタリーの場合はその好例だとされてゐる。だが、吾々はこの場合、近代移民の作用についてマルサスの説き進めるに至らなかつた次の一事を注意しなければならぬ。それは即ち、イタリーの近代移民は結局に於いて國內の人口壓を輕減するには至らなかつたけれども、十九世紀末より國內人口の増加に應じ

て食糧輸入額は益々増加し到底工業製品の輸出額を以てしては賄ひ得ざる國際收支上の不利の状態を一轉せしめて、母國を財政的破綻より救ふに役立つたものこそイタリー移民の送金であつたといふことこれである。かくて近代移民は母國の殘存者に經濟的な生活空間の擴大を許容したのである。たゞ、この生活空間の擴大、換言すれば、國民福祉の上昇は、やがて間もなく國內人口の増殖に導いて行つたといふことに過ぎない。⁴⁾

(六) かく觀察し來るならば、移植民に對するマルサスの「姑息的」態度そのものが問題となるであらう。彼は初期移民の危険と困難とを叙述し、加ふるに過剩人口の捌け口としての効果を拒否せんとした。然しながら近代移植民はかゝる危険と困難とに拘はらず、又所詮は國內人口の壓迫を緩和し得るものではないといふ認識にも拘はらず、相競うて諸國民の行ひ來つたところである。移植民は純粹の經濟的見地からのみ語りうる問題ではない。それには軍事的、政治的諸見地もまた加はるであらう。そして、さうであればあるほど、移植民は進歩的國民にとつて必要不可欠となり、同時にまたその結果は必然不可避免的に「鬭争」と結びつかざるを得ない。まことに白人諸國の近代的移植民は「平和的」でありながら、それは深刻にして實に廣汎なる世界危局の素地を作つた——世界戦争すなはち是れである。

- (1) Malthus, *Principle of Population*, Vol. I, p. 528. 邦譯書四二二—四二三頁。
- (2) *Ibid.* Vol. I, p. 249. 邦譯一九〇頁。
- (3) 拙著『人口理論と人口問題』九七—九八頁。
- (4) Vgl. A. U. E. Kulischer, *Kriege = und Wander züge*, S. 161—162.

九、人口政策の粉飾と眞の國防國家（結語）

世界戦争が——然り第一次のそれも第二次のそれも——近代的移植民問題を根本的な一契機として發生したと説くに當つては、なほ別個の詳密なる論述を必要とするであらう。だが吾々は今それに立入つてゐる邊もなければ、又こゝはその場所でもない。こゝではなほ若干の補論をマルサス自身の戦争觀に加へて稿を結ぶことにしよう。

補論の一として指摘したいことは、人口過剰は戦争の原因であるとはいひながら、時にはその戦争の準備のために、ことさら人口の過剰が策せられることがあるといふ點である。マルサスはこれを大膽率直に表現して次の如く曰ふ、

「その（戦争の）最初の原因及び最も有力な刺戟の一は、疑ひもなく場所と食物との不足であつた。そして人類の事情は、最初にそれが始まつて以來著しく變化したとはいへ、同じ原因は作用を續け、程度こそ劣れ、同じ結果を生んでゐるのである。若しも下層階級の困窮が彼等を驅つて王侯の旗下に赴かしめなかつたとすれば、王侯の野望も破壊の用具を缺いたであらう。徴兵官はつねに凶作と仕事口の缺乏とを、換言すれば、過剰人口を祈つてゐる、

「世界が未だ初期の時代で、戦争は人類の大事業であり、この原因に基づく人口の缺乏は近代とは比較にな

らぬほど甚しかつた頃には、各國の立法者及び政治家は、主として注意を攻防の具に向けて、あらゆる手段を廻して人民の増加を奨励し、不妊及び獨身に汚名を被せ、結婚を讃へた。世俗的な宗教がこれらの一般的世論に追隨した。多くの國々に於いて、自然の生産力は嚴肅な禮拜の對象であつた。劍によつて確立され、従つてその宣敎にはその信徒の非常な死傷を伴はざるを得なかつた。マホメツト敎に於いては、創造主を讃へるために子供を生むことは、人間の主たる義務の一と規定され、最も多數の子孫を有するものは、彼がこの世に生を享けた目的に最もよく適つたものと考へられたのである。かゝる道德感の普及は當然結婚を奨励する効果を有し、それに伴ふ急速な増殖は、一部は絶えざる戦争の結果であり、一部はその原因であつた。以前の荒廢によつて惹起された空隙は、鮮^{あろ}たなる供給の養育に餘地を興へ、又かゝる供給の横溢的速度は、鮮^{あろ}たなる敵意に對して、鮮^{あろ}たなる刺戟と鮮^{あろ}たなる用具とを絶えず提供した。かゝる道德感の影響の下に於いては、絶えざる戦争の狂暴が果して緩和されるか否かも甚だ疑はしいのである。」

右の記述は勿論、「世界が未だ初期の時代で、戦争が人類の大事業であつた」頃について爲されてゐる。だが、一體、戦争が「人類の大事業」でない時代といふのは有り得ようか。して見ればマルサスの記述は、必ずしも現代の吾々と無關係であり得ないわけだ。過剰人口は戦争の原因と主張されながら他方ではその人口を益々稠密にせんとする政策が實施される。クーリッシャー兄弟はこれを特に「國民的人口政策」と呼んだ。そして次の如く曰ふ、

「國民的“人口政策は、出産制限を彈劾する。何故ならそれは一民族の“國民的“即ち軍事的“效力“を減ずるからである。そしてこの人口政策は“空地なき民族“の暴力的な擴大の必然性を鼓吹し、かくて結局、フアシスト的な次の如き國家要請に到達する。曰く、吾等は怖ろしく人口過剰である、故に吾等は擴大を要する。だが、この擴大を遂げんがためには、吾等は能ふ限り人口夥多であらねばならない。それ故に吾等は人口増加を能ふ限り激勵せねばならぬ」と。この人口政策は戦争準備の口實に過ぎない。」

だが、しかし讀者よ、希くはこれを以てマルサスやクーリッシャー兄弟が「國民人口政策」の錯覺を——或ひは粉飾を、哄ふものと見做さざらんことを。吾々はいま現に、かゝる狂瀾の只中に、第二の世界危局の前に、立つてゐる。「富か、死か、いづれかを心に決し、いかなる手段をも辭せざる者は、久しく貧困裡に生きる筈はない。」とマルサスは言つたではないか。否、彼れは一層適切に、かうも言つたのである——「おそらくこの國には、各種族の渴望する程の増員を養ふ力はないであらう。しかし一民族がその勢力を増大すれば、敵は相對的に弱くなるわけであるから、こゝに新たな生存の源泉が開かれ、これに反し、人口が減少すれば、殘存者はこれによつて生活が豊かとなるどころか、むしろ強大な隣國の侵略のために剿滅されるか餓死させられるのである。」と。

吾々はこゝに、マルサス戦争觀の極めて積極的な一面が浮出せられてゐるのを認めざるを得ない。けれども、この補論に於いて特にもう一つ注意して置きたいと思ふのは、人口調節策として「道德的抑制」を提案し囂々

たる世人の論難を買つたマルサスが、すでに前段の章句からも想像し得る如き積極的な一面を有してゐたばかりでなく、無用の戦亂はこれを避けるところの併し眞實に強固なる「國防國家」の確立を、その人口對策を通じて祈念してゐたといふ點である。およそ戦争の慘禍が大であればある程その緩和を希はぬ人はあり得ないと同時に、みづから進みて侵略的戦争の端を切るとはこれを欲しないにしても、防衛的戦争はこれを敢へて辭せざる強固なる國防國家の確立に同意せざる人も亦あり得ないであらう。而して『人口原理論』の著者はこれに答へて、「彼の隣人及び彼自身に對する自己の義務」を守り、「最も困難な境涯に自己と家族とを陥れ」ざるやうな社會に於いてのみ、その二つの目的は同時に達せられると説くのである。かゝる所説が虚心に味讀され適切に評價されるためには、世界は今あまりに激しい狂瀾の中にあるかも知れない。だが私は最後にその章句を左に記して本稿の結びとするであらう。

「私が假定したやうな社會に於いては、その全員は自然の光りから引出され、啓示された宗教の中の強い承認によつて強められた道德律に服従することによつて幸福に到達せんと努めるから、かゝる結婚の起り得ないことは明かである。そして過剰人口の防止は、かくの如くして侵略的戦争に對する主たる獎勵の一を除去し、同時に、相互に他を生む二つの致命的な政治的混亂、即ち内部的専制と内部的騷擾とを根絶せんとする力強い傾きがあるであらう。

「かゝる社會は侵略的戦争は欲しないが、防衛的戦争に於いては磐石の如く鞏固であらう。各家庭が生活必

需品を豊富に所有し、またその慰安と便宜との相當な分量を所有するところでは、時々下層階級を驅つて、
 „どうでもなれ、どうせ今より悪くなりつことはない“と言はしめるところの變革の希望、或ひは少くともそれ
 に對するあの陰鬱な、意氣沮喪した無關心は存在し得ない。各人が自己の享受する健實な利益の價值を感じて
 をり、また變革の見込みは、單にそれらを奪はれるといふ見込みを示してゐるに過ぎない場合には、あらゆる
 心とあらゆる手とが侵入者を追つ拂ふために協同するであらう。⁵⁾」!

- (1) Malthus, Principle of Population Vol. II, pp. 278—279. 邦譯六四〇頁。
- (2) Kulischer, Kriegs- und Wanderzüge, S. 202—203.
- (3) Malthus, Vol. I, p. 136. 邦譯一〇八頁。
- (4) Ibid. Vol. I, p. 53. 邦譯四五頁。
- (5) Ibid. Vol. II, pp. 280—281. 邦譯六四一—六四二頁。